

人 文 教 養 演 習

人文学部 芳 井 研 一

The Seminar on Liberal Arts of Humanities

Kenichi YOSHII (Faculty of Humanities)

The Faculty of Humanities has been practicing the seminar for fresh students for three years. It was a good experiment in education. A number of participants rated the seminar high in the questionnaire on all the students. Almost all instructors are eager to maintain the seminar.

Key words: Seminar on Liberal Arts, Humanities, Questionnaire

はじめに

入学したての新生で、未知の学問を学ぶことに軽い興奮をおぼえない者はいないだろう。しかしカリキュラムや授業内容が、それに応えるものでなければ、彼らは失望し、なかには意欲を失う者も出てくる。

人文学部のカリキュラム改革論議のひとつの柱は、どうしたら一年生向けに大学での学問研究への橋渡しや動機づけを行うことが出来るかであった。人数を制限した演習形式の授業を一年生全員に必修科目として課すことが、最も効果的だろうと大方の意見がまとまるまで、それほど時間はかからなかった。むしろ全学的に一年生に課すべきだとの積極的意見が出て、一部で提案されたが、受けいれられなかった。医系、理工農系、教育系などを含めて実施できれば、選択肢も広がり、一年生もユニバーシティのメリットを実感できただろう。

1. 人文教養演習の概要

人文学部単独の試みとして教養演習（初年度は共通演習と名付けられていた）がスタートしたのは、1993年度（平成5年度）であった。今年で三年目であるが、

順調に実施されている。通年4単位の授業で、演習数は11～12、一演習あたり学生21人を上限としている。この科目のねらいは専門的知識を伝達することを主眼とするのではなく、学生の自発的な学習を促しつつ、大学で四年間学んでいくために必要な文献検索の方法や、演習での発表の仕方、レポートの書き方などを、教官との共同作業の中で学んでいくことにある。

担当者は、各コースから1～3人ずつ選ばれる。毎年新学期が始まる前に、前年度と新年度の担当者が集まって会議を開き、実施してみたいの反省や演習を進める上でのおおまかな方針を確認する。個々の演習は、各教官の構想に沿って実施されるので、運営の仕方はかなり幅がある。今年度のテーマは、「チャップリンと20世紀」、「歴史と文化を考える」、「アジアと日本、そして世界」、「翻訳とは何か」、「現代言語論」、「甘え」など多彩で、学生の知的好奇心を喚起しつつ総合的な視野を養えるよう工夫している。

人文学部は、行動科学・地域文化・情報文化の三課程からなるが、教養演習は2年次以降の専門に縛られることなく、むしろ専門では学べないような内容のものを積極的に選択するよう指導している。学生の選択結果をみると、自分の専門にこだわっている学生と、専門から遠い内容を選択する学生が拮抗している。

1993年度と1994年度には、10項目ほどの質問事項について全受講生にアンケートを実施したが、専攻したい研究領域にこだわらないと答えた学生が、93年度には全体の56.7%、94年度には64.2%にのぼっている。専攻につながる演習を履修することを求めた学生は、40.0%から、33.5%に減った。一年生なので、幅広く学びたいと考える学生が多数派である。

2. 演習内容の評価

実施してみても学生の反応を、アンケート結果から見てみよう。

まず教養演習の評判について。来年度以降も続けた方がいいかとの質問に対して、続けた方がいいと答えた学生は、93年度が58.4%であったが、94年度に76.3%まで上昇した。やめた方がいいと答えたのは、12.4%から1.7%に激減している。定着するにつれ、ほぼ全員が授業の意義を何らかの形で受けとめていることが数字の上にあらわれている。

次に演習の内容についてであるが、演習で大学での研究の仕方や方法について学ぶことができたか、という質問に対しては、93年には61.8%、94年には54.3%の学生が、学ぶことが出来たと答えた。24.2%、23.7%の学生は、そう思わないと答えており、少なくともこの面では二割強が不満を抱いていることがわかる。今後改善していく必要があるだろう。

他方このような演習に参加することで、学生同士の交流が出来るかどうかについての質問には、出来ると答えた履修者は、93年には36%しかいなかったが、94年になると76.3%と倍増した。教官の側もコンパを企画するなど、できるだけインフォーマルに交流出来るよう配慮している。筆者は、医者から飲酒を禁じられているが、3回コンパにつきあった。大学に入ったばかりの学生は、演習にそんな役割も期待しているのだろう。

そんなこともあってか、演習に意欲的・積極的に参加できたかどうかという質問にイエスと答えたのは、93年度は36%であったが、94年度には46.8%に増えた。積極的でないのは、34.3%から23.1%に減った。全員に参加を強制している科目での割合であるから、まあまあいい線にいつているのではないか。

3. 演習の運営について

次に、演習の運営をめぐる様々な条件について考えよう。

まず演習の履修者数21人については、二年間とも七割以上の学生が、ちょうどいいと答えている(73.6%、74%)。もっと少ない方がいいという意見も二割前後ある。半分ぐらいだったらもう少し自由に自分の意見を言えるのにとか、多くても10人以下だと「自分がやるんだという気が起きる」といった、より少人数の演習を希望する意見も根強く寄せられている。

教員一人で通年の演習を担当するクラスと、I期とII期で別々の教員が担当するクラスがある。学生はどう考えているのだろうか。一人で通年担当する方がいいと考えているのは、93年が65.2%、94年が53.2%である。交代した方がいいと考える学生は、16.3%から24.3%へと微増した。教員の側も、通年ではまんねりになってしまうと感じてる人がいるが、これくらいはつき合わないと学生の指導をきちんと出来ないと考える人もいる。学生と教員の個性がぶつかりあう場面もあり、なかなか一般の評価がむずかしい問題ではある。

教養演習の開講時間については、当初から他の授業とぶつからない木曜の5限に設定された。人文学部では、別の選択必修科目である「入門」科目(8単位必要)についても、同様の理由で5限に置かれていた。この時間設定についての不満が、多かった。アンケートにおいて、5限でいいと答えたのは、93年が19.1%、94年は19.7%で全体の二割に満たない。別の時間帯がいいという意見は、75.3%、65.3%であった。5限の演習は疲れて気力が残っていないので、真剣に取り組むことが出来ない。5限だけはいやだ、などの意見が続出した。

そこで、このアンケート結果に即して来年度は木曜4限に多くの演習を移し、4・5限を併存させることで、学生の要望に応えることにした。

4. より充実した教養演習のために

学生の授業評価によると、勉強したい人には、とてもよい授業だった、ゼミ形式の授業の準備体操期間と

してちょうどよかった、少人数なので、積極的に授業にかかわらざるを得ないのがよかったなど、高い評価があった。反面、自分が入りたいクラスに入れなかったのも、意欲がわかなかった。それぞれの演習内容に差があるので、もっと統一して欲しい。討論の雰囲気が堅苦しいので、もっと自由に話せるようにして欲しい。一年間同じやり方だったので、マンネリになった、などの不満も寄せられた。

教員の評価を見よう。教養演習の趣旨を理解し、積極的に取り組んでいる人は、この試みをずっと続けていきたいと意欲的である。少人数なので、目配りもきくし、伸びようとする学生をきめ細かく指導できる。まんべんなくとはいかないが、全体として教育効果があがっている、と実感している。他方各コースから担当教員を選ぶことになっているので、専門の授業のノ

ルマの消化に追われて余裕がないとして、必ずしも積極的でない教員もいる。

それらの教員を含めても、新入生向けに少人数の教養演習を開講する意義を疑う人は、いないだろう。大人数の講義形態の授業を聞いているだけでは（勿論すばらしい授業にめぐり会うこともあろうが）、むなしさは残る。お互いの考え方や調査結果などをぶつけあいつつ討論することは、具体的成果は見えないにせよ、何らかのものが個々の学生のなかに芽生える可能性を開く。

であれば、この方式を出来るだけ全学にひろげ、お互いの多様性を競ってもいいのではないか。専門教育の根っこをかたちづくる教養教育のなかでも、教養演習の教育効果は、人文学部における三年間の取り組みのなかで、実験済みである。